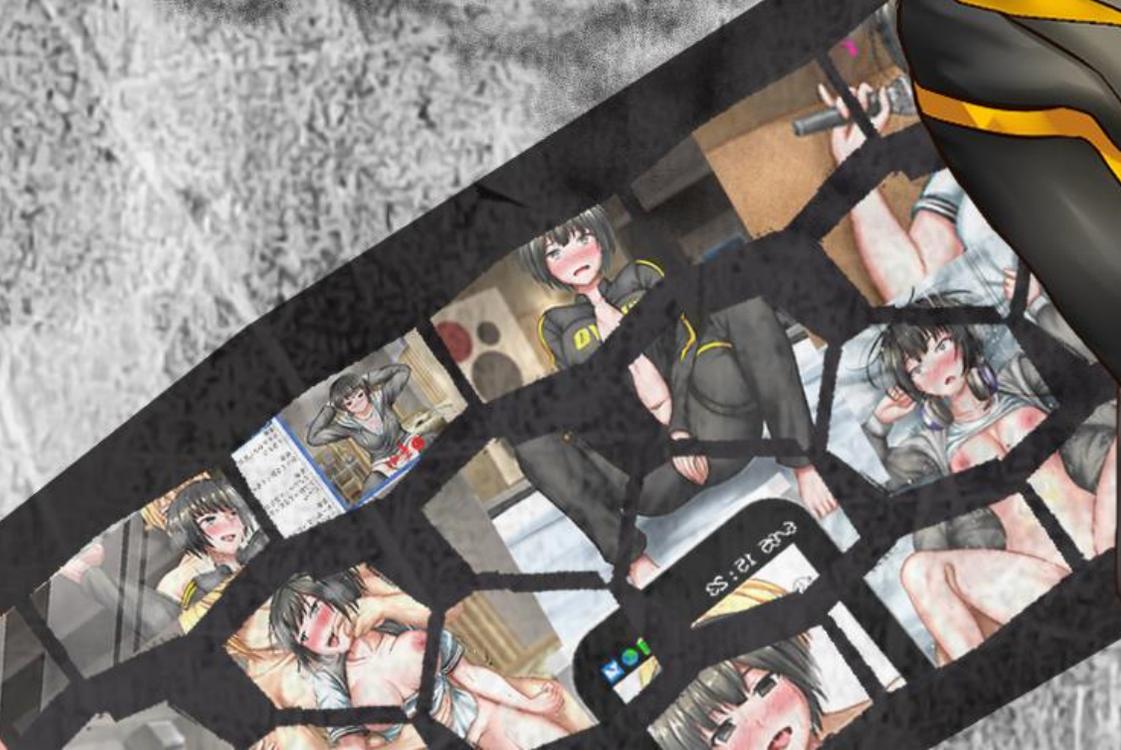


ハメられた幼馴染

-クールな彼女と不良と僕-



注意事項 Important Notice

この物語は現実と虚構の区別のつく大人のためだけのものです。この物語を未成年に見せる行為は性的な虐待とみなされる可能性があります。

この物語はフィクションであり実在のいかなる人物、組織、物語とも関係ありません。

This story is only for adult reader who can distinguish fiction and reality. The action that is showing this story to children can be recognized as sexual harassment.

This story describes fictional story, any of characters and organizations aren't related with existing persons and organizations.

注意事項

物語内で描写された行為を実際に行った場合あなたやパートナーが肉体的心理的に傷つく可能性があります、法的に処罰の対象となる可能性があります。

本作の著作権はサークルHO及びそれぞれの作品の製作者にあります。形式に関わらずいかなる海賊行為や無許可アップロードは法的措置の対象となります。

Important Notice

In addition, if you imitate action which is described in this story, you and your partner might be physically or mentally injured.

All copyrights of this work is possessed by Circle HO and artists who made the works. Any way of piracy and unauthorized uploading are subjects to legal action.

INDEX Old→New

1 2 3 4

Movie

Photo

Diary

GIF

Play

AGE



18

60+

Related Tag

- Girl
- Bike Girl
- Young
- Young Girl
- Big Stick
- NTR DQN
- Easy Girl 3P
- Anime
- Dancer



プロ-グ 1 : 幼馴染

主人公視点



プロ-グ 2 : 幼馴染

主人公視点



第一幕 : 友情

主人公視点



第二幕 : 告白

ユキナ視点



第三幕 : 嫉妬

主人公視点



第四幕 : 豪腕

ユキナ視点



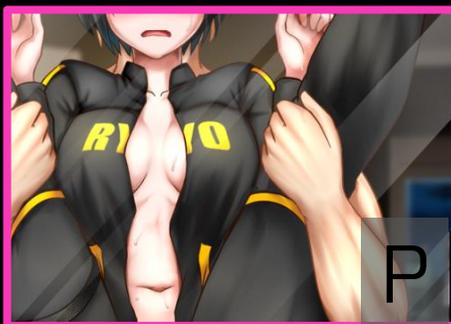
第五幕 : 嫌悪

主人公視点



第六幕 : 不安

主人公視点



第七幕 : 困惑

ユキナ視点



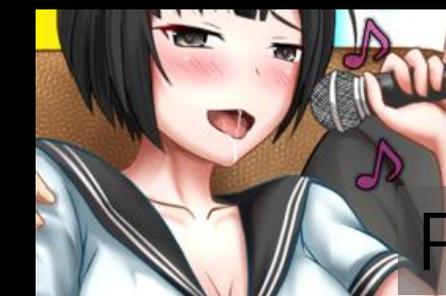
第八幕 : 懊惱

主人公視点



第九幕 : 憂鬱

ユキナ視点



第十幕 : 疑問

主人公視点

YUKINA

RYU



YU

07 09 SAN

リュウ 18:50
逃げんじゃねーぞ！
好きな女だろ？
見に来いや！

プログラム

僕達

の結末

主人公視点

どうしてこんな事になってしまったのだろうか。



「サーセン、センパイの
幼馴染で筆おろしして
もらっちゃいましたあw」

幼馴染のユキナが犯された。

「センパイ泣いてるんすか？
そりやそーっすよね。」

年下のオレがコイツで
筆おろししたってーのに、

コイツとずっといた
センパイはまだ

ドーテーなんすもんね」

いとー

「ハハハ、

そりやそーだ」

「ふっー

そんなん泣くわな」

こんな人間のクズどもに。
でもそれ以上に悔しいのは…。

「オラツツ、

しゅんっ
しゅんっ
しゅんっ

リュキナもなんか言っつてやれよ」

「ジュウセンパイ、

ユウをセンパイなんて

呼ぶ必要ないって。

あうっ...♡♡♡

キュン

キュン

ド...ド...ド...

幼馴染に告れない

女々しいヤツなんだから。

それに、チンポの成長は

ユウ止まってるみたいだし♡」

その状況をユキナが受け入れていることだ。しかもあんなに嬉しそうに。

「へへへ、ユウ…」

オレのチームに入るだろ？

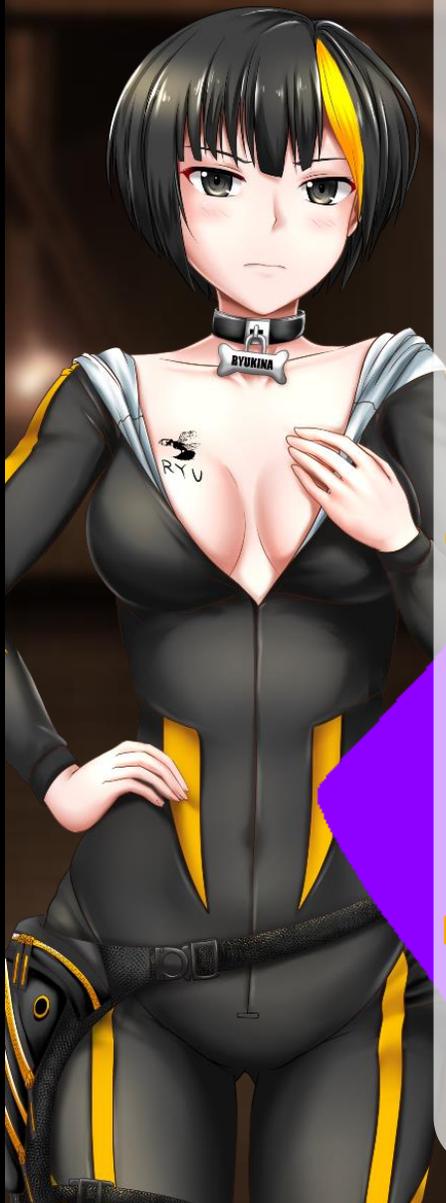
入ったらリュキナ貸してやるぜ」

「アニキ、マジでコイツ入れるのかよ」

「そりゃコイツがいなかったら

リュキナゲットできなかつたしな」

「あー、そりゃそーか。ユウがクソ雑魚
だったから、リュキナチヨロかつたんだ
もんな。おい、なんか言ってやれよ」



その言葉は真実だ。

僕がもう少し強かったら…。

もう少し勇気があったら

結果は変わったのかもしれない。

「ユウ」

ユキナはユウのこと好きだよ。

だから一緒にいるためにユウにも
リュウセンパイのチームに入っ
てほしいな」

「おお！」

奇跡の告白じゃん」

えへへ

もろもろ

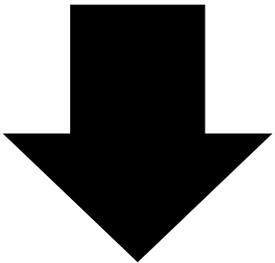
「青春ってカンジだわ」

「他の男のチンポ

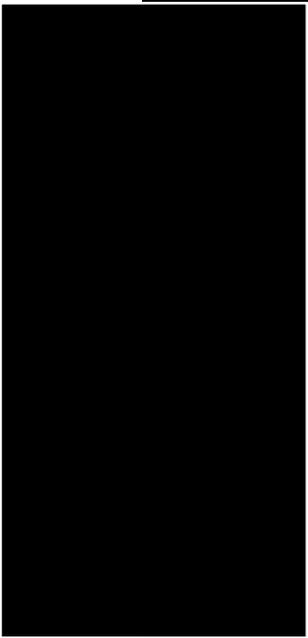
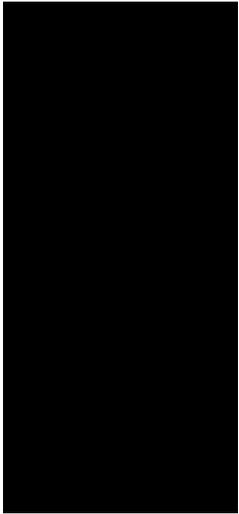
挿されながら告白とかW」

「ユキナ…」

ほんの数ヶ月前
この始まりは



05 | 09 | MON



ユキナのためだから」

「僕、入るよ。」

YUKINA

RYU



YU

05 09 MON

ユキナ 07:50
おはよー、
遅刻するよ！

プロログ2

幼馴染団

ユキナ

主人公視点

ユキナは僕の幼馴染だ。



たまたま親が友達同士で子供の時からよく遊んだ。そのせいとお互いの趣味や好みは似てるし、話していてもあまり異性だと意識していない。

小学校の時は一緒に通学していたけど、そのうちからかわれるようになって、一度別れて帰るようになった。

でも中学校終わり頃には示し合わせたように『ゴーストウィッチュ』というロックバンドにハマって、『人目なんか気にせず生きよう』と好きな歌の歌詞のとおりと一緒に帰ることにした。



ユキナを異性として意識し始めたのがいつ頃なのかはあまり覚えていない。それぐらい身近だったから。

いつの間にか僕はユキナに憧れるようになっていた。彼女のスラックとして引き締まった体はかっこいいし、さばさばしているのに女らしい魅力もある。

いつの日かユキナと付き合えたらいいのに。そう思ってたけど、同時に告白して今の関係が壊れるのも嫌だった。

一緒に『ゴーストウィッシュ』について語り明かしたり、買うこともできないかっこいいバイクのカタログで盛り上がったたり、そういう関係をずっと続けたかった。



お揃いで買ったカブに乗って隣県のライブに行ったり、時々二人で海に行ったりするゆるい感じがすきだった。二人で行けばユキナの親も少しくらい遅くなってもあまりうるさく言わない。もちろんバイクもロックも小遣いで楽しめる範囲でしかないのはわかってるけど、それでも僕もユキナも青春を懸命に楽しんでいた。

「ユウ、今日も寝坊？」
「ユキナこそ、昨日深夜まで喋ってたのによく起きれるな」
「あはは、ボク、朝強いからね。
いや、ユウが弱すぎるだけか」
「おいおい、人のことを朝っぱらからそんなに言うなよ。
まだ眠いんだから」



そんな友達以上恋人未満の
日常がずっと続くと感じていた…。

「新しい転入生を紹介するぞ」

「ちーす、リュウっていいーます。

まっ、仲良くしてくれや」



新しい転入生は明らかにガラ
が悪いやつだ。ウチの学校には
まずいないタイプで見た目は
らして不良だ。

あんなに仲良くした様子も
うながい。だろ。うた。絡まないほも

てやま。つ。だ。触らぬ神に祟りなしっ

そう思ったたつてのに、僕はなんて
お人好しなんだったんだろつか。
移動教室で迷っているリュウに声か
けてしまった。



「いやー、わりいわりい。
オレ、すこし怖そうに

見えちまうからな
誰も助けてくれねーんだもん」

「そりゃ、

その金髪じゃしようがないよ」

「やっぱりそっか、

でも結構これ気に入ってんだよな」



「うん、似合ってるよ。

なんかロツクな感じでさ」

「お、女子に褒められた！

やったぜ」



「おいおい、ユキナ、
お前も道に迷ったのか」

「ユウくんに借りたCD返すの
忘れてたの思い出したから」

「お、イマドキCDって渋いな。
つーかそれ『ゴーストウイッシュ
じゃん』」

「え、知ってるのか？」

「とーぜんだろ。
最近チヨー熱くなってるんだろ」

「うっそー！」

うちの学校で知ってるの
たぶんボクとユウくんだけだよ」

「そりゃあ見る目ないな、
ここの連中」

「『ゴーストウィッシュ』
仲間じゃん！」

ねえ、放課後カラオケ行こうよ。
ユウくんも行くよね」



見た目ほど悪いやつじゃないのか？
その時はそう思ってたけど、
それがすべとの間違いの始まりだった
んだと思う

放課後、カラオケに行く。

校則的にはアウトだけど俺とユウは時々行ってた。

「ユキナちゃん、歌上手くね？」

「あはは、けっこうユウくと来てるからね。リュウくんも結構上手いよね」

「ドリンク取ってくるけど、なにがいい？」

「私はソーダかな」

「オレはコーラで」

ずっと二人しか知らなかった曲をリュウも歌う。「ゴーストウィッチ」が好きってのは本当らしい。青春って感じて楽しい。ユキナと二人だけでも楽しかったけど、ユキナとひよっとしても楽しかったら男の友達で気が合う奴がいても楽しいかもしれない。

「なあ、オレらそのうちバンド組まね？」

「ユキナちゃんがボーカルでオレがドラムやっからさ」

「たしかに面白いかもな。ということは僕がギターかベースか」

「アハハハ、ユウがギター持ってるの想像できないよ！でも楽しそー」

楽しい時間はあっという間に終わる。楽しいんだけど……
……ただ……リュウがユキナに話しかけすぎている気がする。

もともと男っぽくてクラスでも少し浮き気味のユキナが人と話すのに慣れていないだけかもしれない。それなのに僕の胸はなんとなくざわついた。



カラオケからの帰り道……



「ボクはこっちなんだ」

「へー、そうなんだ。」

今日はまじありがとな」

「ボクも楽しかったからいいよ。」

またカラオケいこー」

「じゃあな……」

「なあ、ユウ。ちよつと

そこの公園よってかね？」

「なんだよ？いきなり」

「まあ、そういうなって。」

男同士の会話ってヤツよ」

「ん？わかった」



「で、なんだ？」
「なあ、ユウってユキナちゃんと
つきあってるわけ？」

ドキっとする。考えないように
していたことにコイツはズケズケ
入り込んできた。



「いや…、
つきあってるって
わけじゃないけど…
幼馴染の腐れ縁と言うか…」

「じゃ、
オレが手を出してもいいか？」

「え、それは…」

思わず言葉に詰まってしまっ…。
付き合っているわけじゃないけど…。

「つきあってねーならいいよな。オレだってダチの彼女に手を出すほど野暮じゃねーからな」

「ユキナがなびくはずないからな。ちよつとカラオケで仲良くなつたからって、アイツ結構頑固なところあるんだから」



ユキナはたしかに美人だ。だからこそ何人も男子が告って失敗してきた。それを隣で見ている僕には余計に二の足を踏んでしまったんだと思う。

「へへ、見てろよ」

そのリュウの自信満々な言葉に。なぜか後ろ寒いものを覚えてしまう。



05/11 Tue
12:35

ユウ
数学のテスト範囲
教えてください、
ユキナ様あ！👉



青春の二幕

告白

ユキナ視点

告白の数日前…

「なあ、ユキナちゃんって

ユウのことすきなんだろ？」

「ん、そうかもね」

「じゃあさ、

オレと付き合わね？」

「ちよつと意味分かんないよ。

何言ってるかわかってる？」



「とーせん、

俺がいいたいのはさ、

ちよつとお試しでつきあって

ユウくんにはキモ手焼かせて

やろうぜってことなんだわ」

「んー、そんなのが効くかな」

ちよつとおもしろいと思って
しまう。どーせこのままだといつまで
たっても変わらなくて、それはそれ
でいいと思つてたんだけど。



「ほら、オレもこのガッコの
ダチの二人を助けたいわけよ」

「下心ニエニエなんだけど」

「まーな、
でもぽつと出のオレが
二人の間に割って入れる
はずないじゃん」



「まっ、それもそっか。
じゃあ、約束してよ。
お試し期間は一週間だけ、
私に触らない」

「りょーかい」

これで何かが変わるとは思わない
けど、青春らしくていいかもね。

ボクはリュウにユウの家の近くの公園に呼び出された。きつと例のアレだ。わかかっていてもドキドキする。だってのに肝心のリュウがその場所にはいない。ふつーこういう時つて男子が先に来てるもんだと思うんだけど。



「もー、人のこと呼び出しておいて遅刻とか、アイツやっば見た目通りのだらしなさじゃん」

なんかドキドキして損した気がする。まっ、ただの冗談だよな。

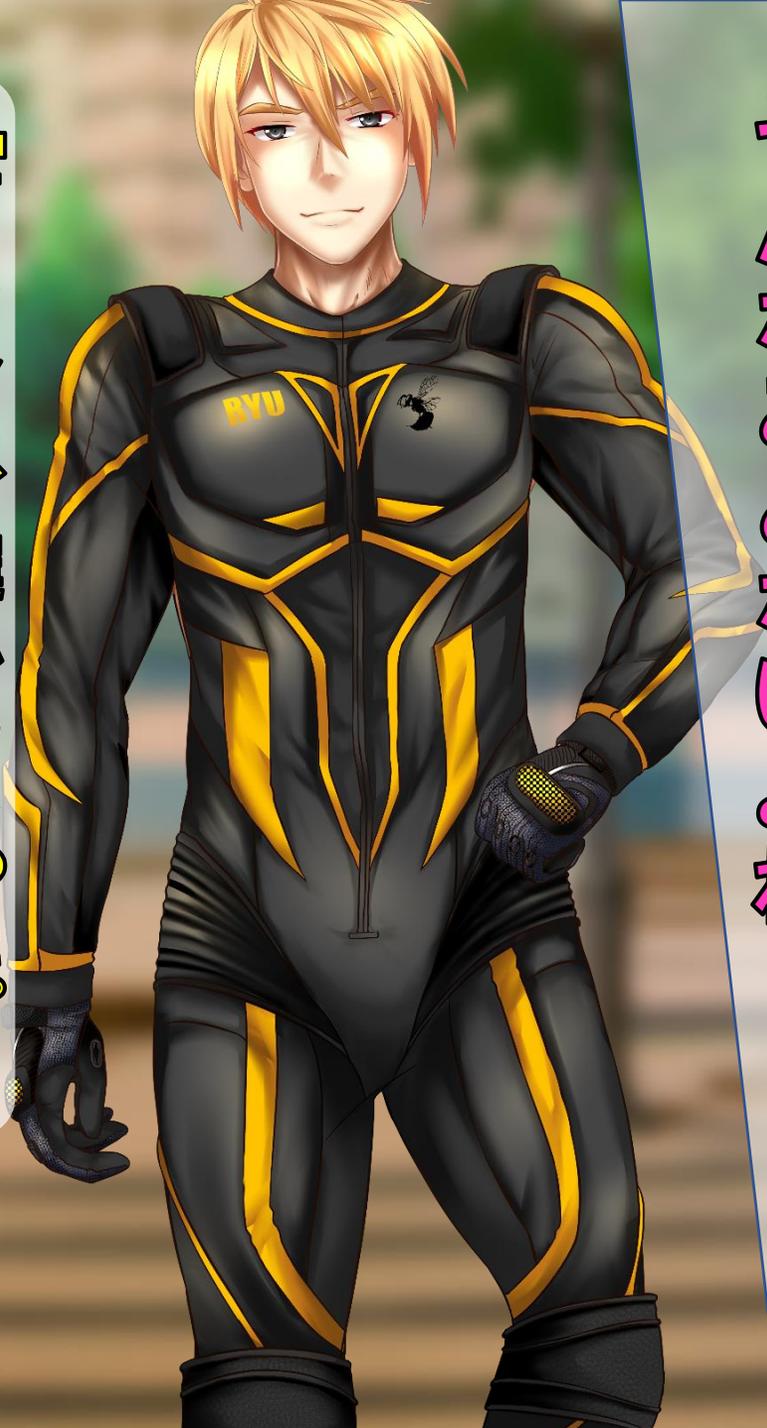
そう思いながらも心のどこかでモヤモヤする。

その時、聞き慣れないエンジン音が近づいてきた。このあたりではあまり見ない格好いいバイクだ。

え、まさか！

まさかまさか！

そんないや、そんないや、そんないやね。



「すまねえ、遅れちゃった。ライダーズーツに着替えんのに案外時間かかってな」

胸の奥で今まで感じたことがない感覚。ただの不良だと思っただけなのに……。



ほっ

「ううん、気にならないよ。これ、リュウくんなのなの?」

「ああ、ユキナにかっこいいところ見せたくてな」



「なあ、ユキナオレのケツに彼女として乗らねーか。オマエみてえなクールなヤツに出会いたかったんだぜ」

「イヤイヤイヤ、コイツはただの不良じゃん。」

「何格好つけてるんだよ!」



「ユキナ、迷うんじゃない。オレは欲しい女はゼツテー手に入れる男だぜ」

「えっと…」

「少しだけだよ」

やばい、なんか想像を超えて
こられたせいでリュウのペース
に乗ってしまいました……。

すごい速い。



普段乗ってるカブとは全然違う。
まるで風になりそう。

それにリュウの体もなんだか引き
締まってて肩幅も広いし……。



イヤイヤイヤ、完全にこれリュウ
のペースに乗せられてるじゃん。

あくまでもユウに嫉妬させる
ためにつきあってやっつけて
ただだから。

5/13 22:15

<リュウ



明日デート行こーぜ。ちなみにユウにもデート先教えてあつから変なことはいぜ



リュウ



あー、ちよつと気を使わせすぎ
ちゃったかな。でも、本当にリュウくん、
見た目と違って紳士なんだから。
ボクがデートか…、まさか男子と
デートするなんて想像してなかったんだ
けどなあ。そう思いながら鏡を見る。

「お、ユキナちゃん、
すげーかわいいーじゃねーか」



「そ、そうかな？」

いつもどおりだと思っただけぞ」



ユウはいつも気が
付かないんだけどな…。

「お、ジャバ僧がズートとか
羨ましいじゃん。カノジョ、
こんなやつよりオコラと遊ばね？」

え……不良!?!?

今までこんな絡まれたこと一度も
ないのに!?!?!?

「ユキナちゃんは
ちよつと離れてろ！」

「テメーら、オレのオンナにナニ粉
かけてくれてんだ、あああん？」

リュウくん。ボクのために無理
してくれてる？

「あんだとコラア、ヤんのか?!」

「おうおう、

吠えるのだけは一人前だなコラ」

ボク
ゴッ

え、リュウくんが手を出す
の!?! うそ、しかもあんな簡単に
二人相手に……。



「ユキナちゃん、ケガしてねーか？
ったく、口ほどにもねー奴らだな。
マジでワンパンで転がされっとか」



強い…。
本当に強かったんだ。

「いったら？オレって結構つえーんだぜ。
ユキナを守れるくらいにはな」

ドキッ、すごい。ボクのこと守って
くれたんだ。ちよっと先に手を出すのは
やりすぎかもしれない…けど、絶対に
ユウにはこんなのできないし。

「ったく、デートに水挿しやがって。
ユキナちゃん、行くぞ」

差し出された手を握る。硬くて太い、
すっごく男らしくて大人っぽい手。
ボクのことを守ってくれた拳。

一週間があつという間に過ぎた。
思ったほどリュウは強引じゃなかった。

「最後に一緒にドライブ行かね？」



「もう一週間終わったよね」

「あと一日、今日だけだって。
一緒に風になるーぜ。」

ユキナ、そこの駐車場にオレの
単車止めてあるんだわ」

「なにそれ、冗談だよな」

「マジだったって。一週間経ったろ」



その時



視界の端でユウを見つけちゃった。
不安そうだな目でまるで子犬みたいにな
っている。ボクは少し意地悪したく
なっている。ユウに目配せして言う。

「うーん、少しだけだよ。
ちよつと考えるためにね」

「喉乾いたろ？」

差し出されたジュースはすごく冷えてた。彼氏とツーリングに一緒に行くと夜景の見える部屋でドリンクを飲むなんて……。

ちよつとドキドキするシーンかも。



「オレ、ユキナちゃんのことマジで好きになっちゃったかも」

聞きたくなかった言葉が聞こえてボクを現実に引き戻す。

ボクを無理やりベッドに押し倒す。今まで男子の手がこんなに強たいなんて意識したことがなかつた。

「やべえ、もう我慢できねえ」



「だめ、ダメだつて」

「ダメじゃねーよ。」

オマエはオレの彼女だろ？」

「違う！違うから！」

「違わねーよ。」

オマエはオレの彼女だ」



強引にそう迫ってくるリュウくん。怖い。今まで忘れてたけど、リュウくんは不良だった。

「ここ山ん中だから
どんだけ叫んでもいいぜ」

それにどんだけ
あえいでもいいぜ」

「ひゃあっ……」

ボクは自分がそんな声を
出せるなんて知らなかった。
コイツが触れた瞬間、
全身に雷が走る。

「口ではなんつっても、
体の方はすっかり
オレの彼女じゃん」

「ちが……」

ちがうんだ
……っつてええ」

「うわ、すっげー敏感。
もう又ル又ルじゃねーか」

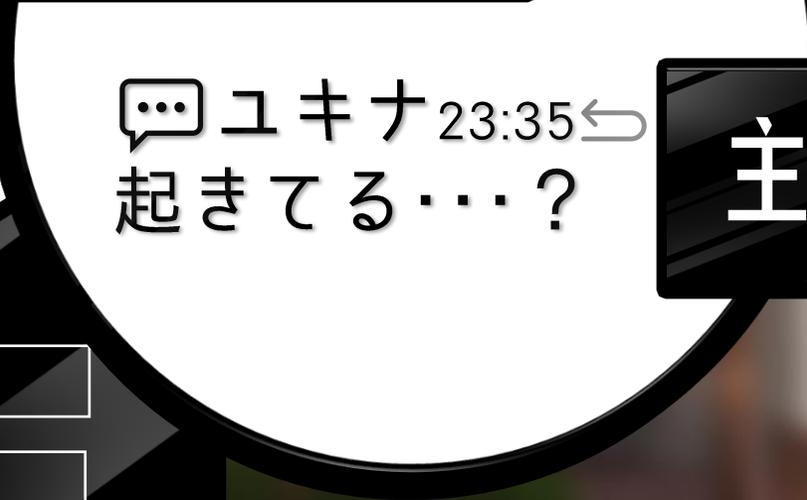




05 | 22 | SAN

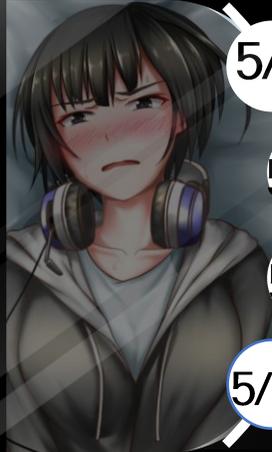


主人公視点



ユキナ 23:35
起きてる…？

Secret Log



- 5/9 リュウの転校
- 5/12 リュウの告白
- 5/14 ヌキナのデート
- 5/21 ヌキナの初体験

「よっ、

なにふけーきなツラしてんだ、
ユウ？」

「あ、リュウくん。

別にそういうわけじゃないけど……」

「隠さなくたっていいんだぜ。

そりゃ、ユキナみてえない
オンナ取られたらふけーきなツラに
なんのもわかつから」

「別に取られるとか、

そんなものみたいなこと……」

くそっ、

なんでこんなやつが……。
ユキナがすごく悩んでるっ
てのに気にかけてもしないで……。





青春の七幕
困惑
ユキナ視点

「へへ、いい感じじゃねーか。そんなじゃ、ひとつっ走り行こーぜ」

「っと、その前にい……」

「あんっ、何？」

カミヤツ

「オマエの写真が

ほしかったんだわ」



「ほんつとに

自分勝手なんだから」

でも、サイズが完璧だ。どうやって注文したんだろ。ユウの去年の誕生日プレゼントが微妙だったことを思い出しちゃう。そんな風に考えたくないのに……。

「でけえだろ、
ぜってーユウには
負けねーからな」

「…そんなこと…」

「ユキナのオトコは
こーやって、ユキナの
支えられねーとな。」

あのひよろっちーには
できねえだろ」

「そんなことお…」

ひやあ

あっくっ

「…ないんだからあ…」

ダメなのに。体に力入らないし…
こんな最低のヤツに…。

ビニ

ビニ

「へへ、オレのデカチンで
た〜ぶりマーキングして
やっからな」

「ひゃっ…」

「あっふううう」

「今日はゆっくりユキナと話してえ
からな、優しくほぐしてやるぜ。
まずはゴムつけてくれや」

「はな〜マッマ…」

「いやなの！」

「ナマがいいってか？
オレはそっちのほーが
いいけどなw」

「コイツ…」



**サンプルはここまで
です。**

**ぜひ製品版で残り
350ページ以上をお
楽しみください。**